

## 登山記に見る近世の富士山大宮・村山口登山道

井上卓哉

## はじめに

信仰の対象であり、芸術の源泉として世界文化遺産に登録された富士山。その顕著な普遍的価値は、二五件の構成資産に基づいて証明されている。その一つである「富士山域」には、山頂の信仰遺跡群や北口本宮富士浅間神社、西湖、精進湖、本栖湖に加え、山頂に至る四つの登山道が構成要素として含まれている。

その四つの登山道とは、北麓に位置する北口本宮富士浅間神社を起点とし、山頂の東部へと達する吉田口登山道、東麓に位置する富士浅間神社を起点とし、八合目において吉田口登山道と合流し、山頂の東部へと達する須走口登山道、南東麓に位置する須山浅間神社を起点とし、山頂の南東部へと達する須山口登山道（現在の御殿場口登山道）、そして、南西麓の富士山本宮浅間大社を起点とし、村山浅間神社（村山興法寺）を經由して山頂南側へと達する大宮・村山口登山道（現在の富士宮口登山道）である。

構成要素とされたそれぞれの登山道は、異なる歴史を持ち、それぞれ独自の展開を見せるが、いずれにせよこれまでに多くの登山者を集めてきた。その中には、自らの登山の記録を登山記として残した人々がいる。特に、近世期の登山記は、現在よりもはるかに多くの人々が、富士山を神仏が居処する場所として捉えていた時代のものであり、彼らが実際に山中で何を見て、何を感じていたのかということを現在の私たちが知る貴重なツールであるといえよう。

しかし、近世記の登山記には、前述の四つの登山道によってその数に大きな違いがある。というのも、一八世紀後半には、江戸を中心とする富士講の信者が増加し、他の登山道の合計数にも匹敵するほどの多くの登山者が吉田口登山

道を経て山頂を目指すこととなる。また、須走口登山道については、宝永四年（一七〇七）の宝永噴火により壊滅的な被害を受けたものの、幕府の支援のもと早期に復興したことに加え、富士講の巡礼路に組み込まれたことから、吉田口に次いで多くの登山者が利用することとなった<sup>1)</sup>。結果として、これらの登山道を利用した登山者の登山記が多く残されることとなった。

一方で、須山口登山道については、須走口と同様に宝永噴火により壊滅的な被害を受け、復興まで長い期間を要した。さらに、大宮・村山口登山道については、中世から登山道の管理をおこなってきた中腹の村山興法寺の修験者の活動が一八世紀にはかなり衰退し、登山者が減少していた<sup>2)</sup>。その結果、これらの登山道を利用した登山記の数は、ほとんど見られない。

この差異は、各登山道の登山記に対する研究成果の蓄積という意味でも大きな違いとなっており、近世の富士登山の状況については、吉田口や須走口からの分析が中心となっている。

こうした状況のもと、富士山かぐや姫ミュージアムのリニューアルオープン1周年を記念して開催した「富士登山列伝〜頂に挑むということ」展（会期：平成二九年六月三日〜八月二七日）において、富士市立富士文庫にて所蔵されている大宮・村山口登山道の登山記二点（『不尽嶽志・東游日歴・北行日譜』・『富嶽行記』）を紹介した。展示では、その登山内容の詳細を紹介することが叶わなかったため、本稿では、大宮・村山口登山道の歴史の変遷を概観するとともに、上記登山記の書誌情報を及びこれらの登山記に記された富士登山の様子を紹介したい。

## 一 大宮・村山口登山道の歴史の変遷

富士山の南麓からの登山は、富士上人とも称された平安時代末期の修験者、末代(一一〇四不明)が発端であるとされる。末代は、富士山へ登山し、山頂に大日寺を建立し、さらには一切経を鳥羽上皇から受領したうえで<sup>(3)</sup>、富士山頂へとそれを奉納したことで知られる。また、『地藏菩薩靈驗記』によれば、富士山の麓、村山の地に伽藍を営み、自らの肉身をそこに納め、大棟梁と号したとある<sup>(4)</sup>。この伽藍がいわゆる村山興法寺であり、末代の偉業を追って富士山中で修行する人々(村山修験)の活動拠点となった。

その後、鎌倉時代には正別当頼尊なる人物が、富士山での修行を富士行として確立し、村山の修験者たちを組織化していくこととなる<sup>(5)</sup>。そして、戦国時代には、村山修験は今川氏の庇護を受け、その活動範囲は富士山を離れて各地へと広がっていくこととなる。

さらに、江戸時代には、村山から各地に先達が免許され、先達の免許を得た修験者たちは、先達所と呼ばれる担当地域の人々を引導して富士山への参詣に訪れた。また、村山の修験者達は各地を檀廻して富士山に対する信仰を広め、富士山への参詣を勧めたとされる<sup>(6)</sup>。

しかしながら、宝永の噴火や、江戸の富士講の隆盛などにより、一八世紀には村山修験の活動は衰退していくこととなる。そのスピードはかなり急速であったようで、文化一三年(一八一六)から天保五年(一八三四)にかけて新庄道雄によってまとめられた駿河国の地誌である『駿河国新風土記』には、江戸時代初頭には六〇〇軒あまりあった村山の民家の戸数が、一八世紀中頃には六〇から七〇軒、そして文政九年(一八二六)にはわずか二軒となっていたという<sup>(7)</sup>。

なお、新庄道雄は『駿河国新風土記』をまとめるにあたって、実際に大宮・村山口登山道を利用して富士登山をおこなっており、その際の記録が『駿河国新風土記』に所収されている。その記述は緻密で、近世期における大宮・村山口登山道の状況を知ることができる文献として、先行研究において、数多く参

照されている。

こうして一九世紀に入るとかなり衰退した村山ではあるが、修験者の活動は行われていたようで、幕末においては、丹後国宮津藩第六代藩主の本庄宗秀や、駐日英国特命全権大使、ラザフォード・オールコック一行の登山の際には、村山の修験者が道中の案内をした記録が残されている<sup>(8)</sup>。

しかしながら、明治初期の神仏分離政策と修験道禁止令により、村山修験の活動は致命的なダメージを受けることとなる。さらに、明治三九年に村山を経由しない、大宮新道が開発され、末代によって開かれたとされる大宮・村山口登山道の利用は大きくその姿を変えることとなる。

## 二 登山記の解題

### ① 不盡嶽志・東游日歴・北行日譜

所蔵・富士市立富士文庫

著者・羽倉簡堂(一七九〇～一八六二)

成立・天保九年(一八三八) 篠田懋手校

書誌情報

法量・縦二四・八センチ 横一一・四センチ

丁数・三七丁

表紙・原装砥粉色無地

外題・左肩直書墨書「不盡嶽志 完」

前付・目録あり 不盡嶽志所収の三九項目を記載

本文冒頭・

不盡嶽志「不盡嶽志／簡堂羽倉則著／不盡嶽／岳有数名通號富士……」

東游日歴「東游日歴／文政丁亥七月七日戒北行前夕天陰欲雨……」

北行日譜「北行日譜／己丑九月四日首途過清見寺依山臨海……」

本文の構成・無辺無界 九行二〇字 漢文 句点あり

後付・なし

刊記・奥書…本文末に朱書「天保戊戌仲夏念四日篠田懋手校」

内容

著者の羽倉簡堂は、幕府役人で各地の代官を務めた父権九郎秘救の大坂時代に生まれる。一九歳の時に父と死別し、越後脇之町代官に就任し、以後、各地の代官を歴任する。文政四年（一八二二）に遠江中泉代官、文政六年（一八二四）に駿河遠江信濃支配・駿府御蔵方として、天保二年（一八三一）まで駿府に在勤した<sup>90</sup>。

本書は駿府滞在中の著作で、不盡嶽志・東游日歴・北行日譜の三部構成となっている。

まず、不盡嶽志は富士山中や富士山周辺の名所などを三九項目取り上げ、解説した地誌である。

次に、東游日歴は文政一〇年（一八二七）七月七日から七月十九日（現在の暦で八月二日から九月九日）にかけて実施した富士登山（登山は大宮・村山口登山道、下山は須走口登山道を利用）や伊豆方面を巡った際の紀行文である。なお、詳細なルートについては、図1（巻頭図版2）及び表1に示した。

最後に、北行日譜は、文政一二年（一八二九）九月四日から九月二十六日（現在の暦で一〇月一日から一〇月二三日）にかけて、富士山の東から甲斐国に入り、そこからさらに信濃方面へと足を伸ばした際の紀行文である。

上記三部はそれぞれ漢文で記され、難解な部分もあるが、全体的に簡潔にまとめられおり、簡堂の冷静な観察眼が窺える。一方で、東游日歴・北行日譜の中には、温泉地に数日間滞在し、一日何回も温泉に入ったことや各地の名産に舌鼓をうつ様子が記されており、リラククスした旅でもあったようである。

さて、本書であるが、本文末に朱書で「天保戊戌仲夏念四日篠田懋手校」と記されており、篠田懋なる人物が写したものであることがわかる。本書の同時代の写本として、国文学研究資料館の所蔵本があるが（請求番号X0354・001）、不盡嶽志・東游日歴・北行日譜に加えて、駿府の地誌である「駿河府志」が所収されている点で、富士文庫本と異なる。

さらに、駿河府志を陸嵯録、北行日譜を環嵯録、駿河府志を駿城記と改題し

て明治一四年（一八八一）

に発行された刊本も存在する。ただし、写本と刊本の内容はほぼ同じであるものの、両者の間には細かい差異が見られる。それぞれ異なる正本を用いたのか、刊本発行の際に正本あるいは写本を改訂したのかについては、今後検討する必要がある。ただし、写本及び刊本について分析した先行研究は、管見の限り見つけることができなかった。

また、本書については、デジタル化され富士市立中央図書館のホームページで公開されているほか、国文学研究資料館所蔵の写本・刊本、信州大学所蔵の刊本もそれぞれデジタル化されたものが公開されている。

なお、富士山の登山記である東游日歴については、本稿末に全文の画像と意訳を掲載した。意訳については不十分な箇所もあるため、御意見・御指摘をいた

表1 羽倉簡堂『東游日歴』（文政10年・1827）の行程一覧

月日		出発地	主な経由地	目的地（宿泊地）
旧暦	新暦			
7月7日	8月28日	駿府	下吉田・薩埵峠・蒲原・富士川・岩本	大宮
7月8日	8月29日	大宮	富士山本宮浅間大社・万野原・大石寺・白糸の滝・上井出・狩宿	大宮
7月9日	8月30日	大宮	村山・馬返し・笹垢離	一之木戸（大日堂）
7月10日	8月31日	一之木戸	三合目室・五合目室・六合目室	山頂
7月11日	9月1日	山頂	雷岩・金明水・薬師室・九合目室・六合目室・一合目小屋・馬返	須走（西寿院）
7月12日	9月2日	須走	茱萸沢・神山村・深良村・佐野	三島
7月13日	9月3日	三島	三嶋大社・柿田川・大庭村・葦山・北條村・修善寺	修善寺
7月14日	9月4日		終日修善寺に滞在	修善寺
7月15日	9月5日		終日修善寺に滞在	修善寺
7月16日	9月6日		終日修善寺に滞在	修善寺
7月17日	9月7日	修善寺	午後修善寺を出発	古奈
7月18日	9月8日	古奈	沼津城・原・松蔭寺・柏原・須津沼・雄度港（吉原湊）	吉原
7月19日	9月9日	吉原	薩埵峠・清見寺・江尻・下吉田	駿府

できれば幸いである。

②富嶽行記

所蔵…富士市立富士文庫  
 著者…原徳斎(一八〇〇〜一八七〇)  
 成立…文政十一年(一八二八) 自筆  
 書誌情報

法量…縦二四・〇センチ 横一六・〇センチ

丁数…二六丁

表紙…改装朽葉色無地

外題…左肩題簽に墨書「富嶽行記 全」

前付…題詞あり 左肩に直書墨書「富嶽行記 全」

本文冒頭…「行李の友／萬事無心一釣竿とハ漁物の樂なり…」

本文の構成…無辺無界 一行二七字程度 かな交じり文 句点なし

後付…本文に続いてに原昌識(徳斎の子)による跋文(自筆)あり

刊記・奥書…本文末に「干時文政十一年六月日徳斎主人自記」

内容

著者の原徳斎は江戸時代後期の儒学者。志賀理斎の子。幕府の修史事業に携わり、著名な儒学者をまとめた『先哲叢談』の筆者として知られる原念斎の養子となり、本人も幕府に仕える<sup>10)</sup>。

本書は、文政十一年(一八二八)の五月二四日から六月一二日(現在の暦で七月五日から七月二三日)にかけて、徳斎の母(念斎の妻)と徳斎の友人二人の四人で諸国を巡った際の紀行文である。そのルートは図1(巻頭図版2)と表2に示したように、江戸から甲府に向かい、鰍沢から富士川を下って万沢經由大宮へと入り、大宮・村山口登山道で富士山に登る。そして、同じルートで下山し、東海道を江戸へと帰っている。

道中で見聞したことを詳細に記すほか、各地の風俗や名所旧跡、風景美についての見解を述べており、当時の状況が良くわかる紀行文である。

表2 原徳斎『富嶽行記』(文政11年・1828)の行程一覧

月日		出発地	主な経由地	目的地 (宿泊地)	宿
旧暦	新暦				
5月24日	7月5日	自邸	高井戸・布田	石原	鶴屋
5月25日	7月6日	石原	府中・日野・八王子	河原宿	吉澤屋
5月26日	7月7日	河原宿	大戸・安内・高尾山・小仏峠・小原	与瀬	京屋
5月27日	7月8日	与瀬	吉野・関野・上野原・鶴川・野田尻・上鳥沢	猿橋	杉田家
5月28日	7月9日	猿橋	駒橋・大月・花咲・白野・黒野田・鶴瀬	猿橋	仲屋
5月29日	7月10日	猿橋	鶴瀬・天目山・勝沼	栗原	湯嶋屋
5月30日	7月11日	栗原	石和・甲府・布施	鰍沢	てらこや
6月1日	7月12日	鰍沢	身延山	南部	杉田家
6月2日	7月13日	南部	万澤	大宮	松葉屋
6月3日	7月14日	大宮	村山・札打・横根・権現坂・長坂・中宮八幡宮・馬返し・女人堂・新小屋・大縦・笹垢離	小室大日	
6月4日	7月15日	小室大日	胸突坂・富士山頂	村山	宿坊
6月5日	7月16日	村山	宮内村・重須・本門寺・上井出・白糸の滝・狩宿・中井出	大宮	松葉屋
6月6日	7月17日	大宮	久沢・暑原・曾我八幡宮・曾我寺・吉原	沼津	あら井屋
6月7日	7月18日	沼津	三島・箱根	小田原	葛井屋
6月8日	7月19日	小田原	大磯・平塚・四ッ屋	藤沢	だんご屋
6月9日	7月20日	藤沢	江ノ島	鎌倉	小池屋
6月10日	7月21日	鎌倉	葉山・秋谷・和田	三崎	須関屋
6月11日	7月22日	三崎	浦賀・大津・金沢・保土ヶ谷	神奈川	羽根沢屋
6月12日	7月23日	神奈川	川崎・品川・日本橋・根岸	自邸	

なお、本書は徳齋の自筆と考えられる。写本については、『富士詣行李の友』の題名で、国立国会図書館へと収蔵されている（請求番号：和古書・漢籍109・60）。

また、本書については、富士宮市の郷土史家、遠藤秀夫氏が『あしなか』第一一七輯にて全文の読み下しを紹介している<sup>(11)</sup>ほか、富士山周辺部分については、『富士宮市史』で詳細に取り上げられている<sup>(12)</sup>。しかしながら、富士山の大宮・村山口登山道の登山記として広く知られている文献ではないため、改めて解読を試みるとともに、上記文献を参考にしながら、本稿末にて紹介を試みた。

### 三 富士登山の記録

#### ・大宮から村山

##### ①東游日歴

七月七日早朝、駿府を出発した簡堂は東海道を東に進み、午後四時頃には富士川を渡り、左に折れて岩本村を経由して大宮に入った。簡堂は、大宮は賑わっており、商売が盛んにおこなわれていると述べている。

翌八日の早朝、簡堂は浅間宮（富士山本宮浅間大社）に参拝している。また、社殿脇の池（湧玉池）について、深さは三、四尺（九〇センチから一二〇センチ程度）であり、登山者は池の中で水を浴び、垢離を取ることが記される。また、池が南方に流れており、そこにかかる橋（神幸橋）の下には、鱸魚（魚種は不明）がたくさんいたと述べる。さらには、社殿の北の老杉についても言及しており、その杉のウロには蛇がたくさんおり、『甲陽軍鑑』に登場する煙を吐くという杉であるとしている。

その後、双山風穴（万野風穴か）、万野原、大石寺、白糸の滝、上井出、狩宿の下馬桜、曾我兄弟の祠、虎御前の祠を巡り、大宮へと戻っている。

翌九日の朝、村山に向けて大宮を出発し、村山に到着後、村山三坊の一つ、大鏡坊で休息をとる。その際、村山の戸数は三、四戸で凋落した様子を述べて

いる。

##### ②富嶽行記

鰻沢から富士川を下り、六月二日に万沢を経由して大宮に入った徳齋一行は、大宮の松葉屋に宿をとる。翌三日に、「けふは主人の世話にて当所大宮の富士宿坊にて切手を取り」とあることから、ここで、いわゆる山役銭（入山料）を支払ったようである。

一行は大宮で案内の男を雇い、村山へ向けて出発する。村山では、村山三坊の一つ、大鏡坊に入り、院の主人と登山の事を談じた。その際、院の主人は、北口（吉田口）と比べてこの口（大宮・村山口）は道が険しく、この年はまだ登山した者がいないと述べている。また、道も去年もままで、山に登るには道を伐り造る必要があり、登山の許可は与えられないと述べている。

それでも諦めきれなかった一行は、色々と問い合わせた結果、強力を連れて登山することで一応の決着を見たようである。その後、徳齋と友人二人は、村山で垢離を取り、昼食後に出発することとなった。

#### ・村山から小室大日堂

##### ①東游日歴

村山大鏡坊での休息後、簡堂は人を雇い、村山を出発した。馬返（中宮八幡堂）までの道中は霧に囲まれ、詳細な記述は見られない。馬返には、婦女の登山を禁じる札があると記しており、ここで昼食を取っている。馬返から笹垢離までの二里の間は鬱蒼とした森林が広がっており、良材があるが、道が険しく運搬が不便であると述べている。

役行者の祠がある笹垢離から半里ほどで一ノ木戸（小室大日堂）に至る。ここが一合目であり、ここから山頂までの一五三町（約一六・七km）の間が十合に分かれており、各合目に室があるとす。一ノ木戸に到着したのは午後四時頃で、ここで宿を取ることにするが、室の中には多くの先客があり、簡堂は室近くの大日堂に宿泊したようである。大日堂の中には、灯が一つかけられており、三体の仏像が祀られていると述べている。

## ②富嶽行記

六月三日の昼過ぎに村山を出発した一行は、札打、横根、権現坂、長坂、中宮八幡宮、御馬返し、女人堂、新小屋、大樫、笹垢離不動尊、小室大日と進んだ。そして、この行程のうち、村山から五里の間は、樹木が生い茂る場所であり、その境が小室大日であることが記されている。なお、徳齋の母は、駕籠で女人堂まで同行し、そこで男性陣と別れて、村山へと戻っている。

日暮れに小室大日に到着した一行は、小室大日の堂舎の下にある小さな家での宿を取ることにする。この日ここで宿泊するのは、徳齋一行三人と強力力の四人のみであった。ここで、強力は小屋の周りから枯木を集めた。そしてそれを炉にくべて炉の周りで座って夜を過ごしたとある。しかし、寒さは厳しく、まるで一月頃の冷気であったという。

さらに、徳齋は、強力からの指示事項として、排泄物の処理方法についても、「夜中もし両便の催しある時分、家外にて空地に出たる。懐中紙を地に敷きたる。その上に用をなす。直に地上を汚すことを忌む。」と記している。また、強力の話によると、小室大日堂の周辺には、「鼻高様」（遠藤秀夫氏は天狗とする）というものが多く出る怪しい場所であるということを書いている。

## ・小室大日堂から山頂

## ①東游日歴

七月十日、午前二時頃、簡堂は小室大日堂を出発する。いわゆる夜行登山であり、頭上に星が瞬く様子が記される。道中、三合目の小屋の様子を燕の巣に喩えている。その後、四合目あたりで空が白み、六合目で日の出を迎えている。日の出の際、日の光で岩の色が変化する様子を讃えている。

六合目の室で食事をとり、八合目に至って宝永山を見下ろし、まるで耳朶のようであると述べている。ここで、簡堂は、宝永の噴火以前に富士山に登った太宰徳夫（春台）の登岳記<sup>13</sup>で、この辺りに周辺数里の池があり、そこには■魚（コノシロ）が数多くいたという記事を引用し、噴火前にはそういうこともあったかもしれないと述べている。

九合目では、西風によって雨が降り出し、寒さが厳しくなったという。ここから山頂までの数町は極めて険しかったものの、山頂の大日祠へとたどりつくこととなる。

## ②富嶽行記

六月四日早朝、徳齋一行は小屋を出発する。小室大日堂から上は禿山で、そこから山頂までを一合、二合とはかり、一升（十合）で山頂に出ると記している。さらに、小室大日堂から下の木立は神の地であり、上の禿山を仏の地であると述べる。

この小室大日堂からしばらくの区間についての詳細な記載は見られず、続いて七合目の筋岩、七合目上の胸突坂について記される。胸突坂の辺りは、「人間業の登らるべき地」であり、只々念仏の声を力に登ったとある。

この辺りから周囲を眺めた徳齋によると、南は伊豆、右（西）は三保の松原から伊勢鳥羽、左（東）は芦ノ湖から江ノ島・房州（現在の千葉県）のあたりまで見ることができたという。

## ・山頂から下山

## ①東游日歴

簡堂は山頂に到着すると、大日祠の前の石室で宿をとることとなる。そして、ここで飲んだ酒は格別の味であったと述べている。

翌七月一日、簡堂は室を早くに出て、頂上の周囲を見て回っている。残念ながら、この日は籠には布のように白い雲がかかっており、愛鷹山や天城山の峰以外は何も見えなかったというが、山の人の話として、天気が良ければ、筑波山、白山、鳥海山まで見えると記している。

また、室から西は砂地で、その先に剣ヶ峰があり、奥の院を臨むと大きな穴が空いていると記す。さらに、その穴の中には、石燕が多くいて、低い声で鳴いているという。

その後、簡堂は雷岩を見て釈迦峯から金明水に至り、薬師峯の下の石室で休憩し、乾飯屑を食べている。そして、十時頃から、須走方面へと下り始めている。

九合目の小屋は参詣者で溢れかえっており、皆手ぬぐいを首にかけ、仏名を唱えている様子を記す。ただし簡堂は、その様子をみて、神境が汚されていると感じたようである。そして、八合目までは道が険しかったものの、八合目から下は砂道で、一步一步が大きく、あつという間に六合目へと到着したという。その後、坂道は緩やかになり、一合目の小屋で昼食を取っている。ここから須走の西寿院までの間は、木の枝が茂り、ランが多くあり、小さな花の微かな香りが漂っていたと記している。

## ② 富嶽行記

山頂へと到着した徳齋は、山頂の様子を以下のように記している。まず、山頂の入口には大日（如来）が安置されていると述べる。次いで、御鉢（火口）の中に富士浅間が鎮座しており、火口の周囲は一里であると述べる。そして、火口の側には、■の池と呼ばれる湖水があることを記している。さらに、火口の四方の八つの峰を、「八辨の峯」とする。

こうした場所を見ながら、湖水の側で「麗しき白石と焼石」を二個づつ拾った後、下山の途についた。一行が村山の宿坊に到着したのは、夕刻のことであった。

なお、徳齋は下山の途中に、枯骨（死人の朽ち果てた骨）を目撃し、「誠に此山上恐るべき山」であると述べている。また、強力の話として、吉田口には、おそらくこうした遭難者の骨を集めた「千人塚」、「十六人塚」なるものがあることを記している。

## ・下山後

### ① 東游日歴

七月一日の夕刻、須走へと下山した簡堂は、翌日、須走から茱萸沢、神山村、深良村、佐野を経て三嶋宿へと入る。翌日に三嶋大社へ参拝した後、修善寺へと向かい、丸三日間修善寺に滞在し温泉や修善寺の僧との交流を楽しんでいる。

七月一七日に修善寺を発った簡堂は、東海道へ入り、一九日に駿府へと戻る

こととなる。

## ② 富嶽行記

六月四日の夕刻に村山へ下山した徳齋一行は、翌日、村山から重須、上井出と至り、白糸の瀧を見物している。ここで興味深い記述として、上井出で出会った旅人から、根原のあたりで狼が出て八人の怪我人が出たことを聞き、一行が怖れているという一説が見られる。

白糸の瀧の見物後は、曾我兄弟の史跡を見物し、大宮へと戻っている。翌日は、大宮から久沢、厚原をへて吉原へと入り、その後は基本的には東海道を進み、江戸へと向かう。そして、自宅へと戻ったのは、出発から一九日目の六月一二日のことであった。

## おわりに

これまで、近世における富士山大宮・村山口登山道の利用した富士登山の記録としては、前掲の新庄道雄による『駿河国新風土記』が主要な文献として参照されてきた。その内容は、非常に詳細であり、吉田口や須走口と比べて登山者が減少し、衰退しつつある大宮・村山口登山道の状況を知ることができる貴重な記録といえる。ただし、『駿河国新風土記』以外の記録については、その存在もあまり知られず、それほど詳細に紹介されることがなかった。

このような状況のもと、本稿で取り上げた原徳齋の『富嶽行記』と、羽倉簡堂の『不尽嶽志』内の「東游日歴」という二種類の紀行文に収集された富士登山の記録は、新庄道雄の富士登山とほぼ同時期の記録であり、『駿河国新風土記』の記述を補足し、さらに、登山道に関する新たな情報を得ることが得ることができると言える。

例えば、新庄道雄は文政九年（一八二六）の村山には、民家が二軒しかなく、疲弊した状況を記している<sup>14</sup>が、同様の状況を羽倉簡堂も記述している。また、原徳齋も吉田口の登山道が開いているのにも関わらず、村山からの登山道の手入れが未だおこなわれていない状況を記しており、村山の衰退した状況

を知ることができる。さらに、山中の堂舎や各合目の石室、山頂の様子に対する記述も、『駿河国新風土記』の内容を補足し、より具体的な状況を知ることができる手がかりとなる。

一方で、『駿河国新風土記』には言及されていない記述もある。例えば、原徳齋は、当時の森林限界の境に位置した小室大日堂より下の場所を「神の地」、小室大日堂より上の場所を「仏の地」とであると記述している。これは大宮・村山口登山道独特の信仰観を示したものである。

また、原徳齋が強力の話として取り上げた山中での排泄の作法については、明和三年(一七六六)に須走口から登山した池川春水の『富士日記』の中にも同様の記述が見られる<sup>(15)</sup>。これは、いずれの登山道においても、山中をみだりに汚してはならないという認識が共有されていたことの一つの証左となる。

こうした点から見れば、本稿で取り上げた登山記を含め、各種の登山記を比較の俎上に載せることにより、各登山の独自性を知ることとはもとより、各登山道で共通する近世富士登山の習俗や富士山に対する信仰観を見出すことも可能であろう。ひいては、信仰の対象として評価された世界文化遺産・富士山の普遍的価値をより高めることに繋がるのではないだろうか。

#### 註

- (1) 富士山世界遺産登録推進両県合同会議編『富士山・信仰の対象と芸術の源泉』世界遺産登録記念誌(二〇一四)、「吉田口登山道」項、「須走口登山道」項参照。  
 (2) 註1前掲書、「須山口登山道」項、「大宮・村山口登山道」項参照。

(3) 『国史体系 8 本朝世紀』(経済新聞社、一九〇一)、久安五年四月一六日条、同年五月一三日条。

(4) 榎本千賀他編『十四卷本地蔵菩薩靈驗記(上)』(三弥井書店、二〇〇二)、「日金山地蔵事」参照。

(5) 新庄道雄『駿河国新風土記』(国書刊行会、一九七五)、九一一頁。

(6) 富士宮市教育委員会『村山浅間神社調査報告書』(二〇〇五)、九三頁。

(7) 註5前掲書、九一五頁。

(8) 本庄宗秀の富士登山については、富士宮市教育委員会編『袖日記(五番・六番)』(一九九八)、ラザフォード・オールコック一行の富士登山については、ラザフォード・オールコック著・山本秀峰訳『富士登山と熱海の硫黄温泉訪問 1860年日本内地の旅行記録』(露蘭堂、二〇一〇)、E. B. ド・フォンブランク著・宮永孝訳『東西交流叢書13 馬を買いに来た男 イギリス陸軍将校の幕末日本日記』(雄松堂書店、二〇一〇)等に詳しい。

(9) 静岡新聞社出版局編『静岡県歴史人物事典』(静岡新聞社、一九九二)、「羽倉簡堂」項参照。

(10)

(11)

(12) 富士宮市史編纂委員会編『富士宮市史(上巻)』(富士宮市、一九七一)、八〇八、八一三頁

(13) 中山薫氏が、『桜苑文集』第一三二号(二〇一三年)において、大宰春台の登山記である「登富嶽紀事」を意識している。

(14) 註5前掲書、九一五頁。

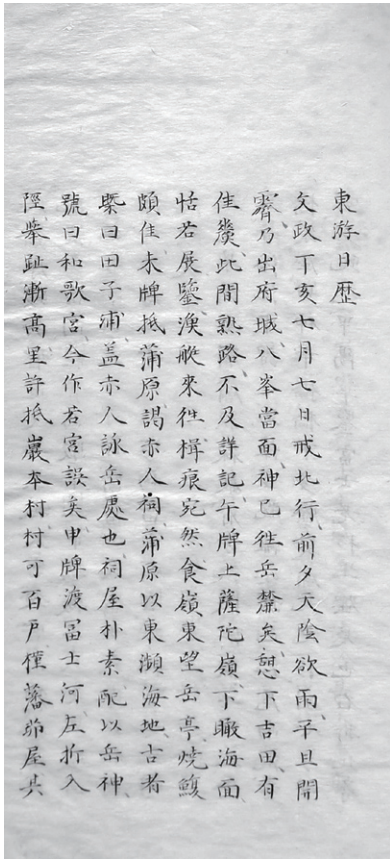
(15) 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一編『日本庶民生活史料集成』第三卷(三一書房、一九六九)、三七七頁。



東游日歴意訳

東游日歴

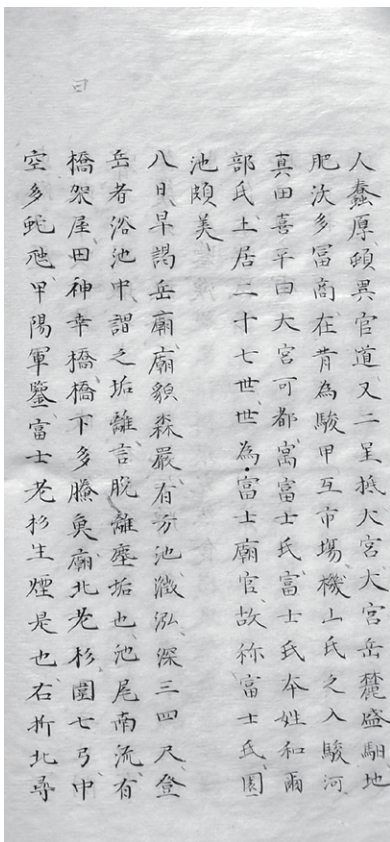
文政一〇年（一八二七）七月七日、前の夜は雨が降りそうで曇っていたが、朝は晴れていた。駿府城を出ると、八峯（富士山）が正面に見えた。これから神のいる山の麓に向かうのである。まず、下吉田（現在の草薙周辺か）で休憩をとった。この間の道はよく知っているので、詳しくは記さない。昼頃、薩埵嶺（薩埵峠）に到着した。そこから海面を眺めると、遠くまで見ることができた。また、漁船が行き来しており、楫（舵）の痕が見えた。嶺の東にある望岳亭で焼いた鰻（アワビ）を食べたが、すこぶる良い味であった。午後二時頃、蒲原に到着した。蒲原では山部赤人の祠を訪ねた。蒲原以東の海岸線は古くから田子の浦と呼ばれている。ここは、赤人が富士山を詠んだ場所である。祠は素朴で、岳神を配して、和歌宮の号があつたが、今は誤つて若宮とされている。午後四時頃、富士川を渡り、左に折れた。しばらく進むと岩本村に到着した。そこは一〇〇戸ほどの村であつた。



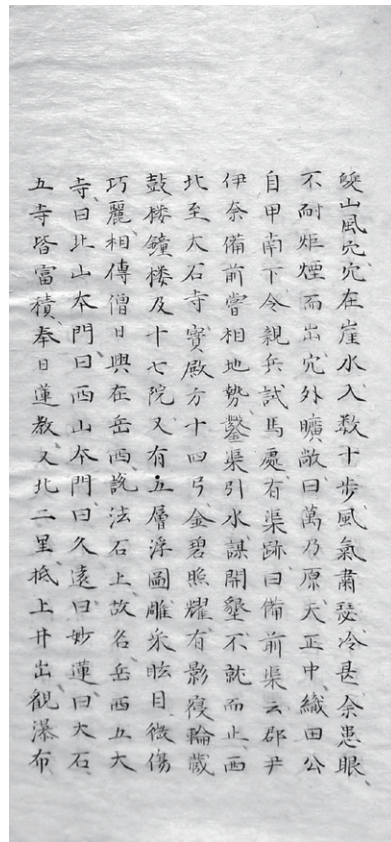
東游日歴-1

官道とはかなり異なる道を二里ほど進むと大宮に到着した。富士山の麓で賑わい、肥沃な場所のため、商いが盛んな場所である。そのため、駿州と甲州の互いの市場があるのも頷ける。機山氏が駿河に入り、真田喜平が言うには、大宮に住む富士氏の本姓は和爾部氏で二七代にわたりこの地で富士廟（富士山本宮浅間大社）の神官を勤めていることから富士氏と呼ばれているという。その池はすこぶる美しい。

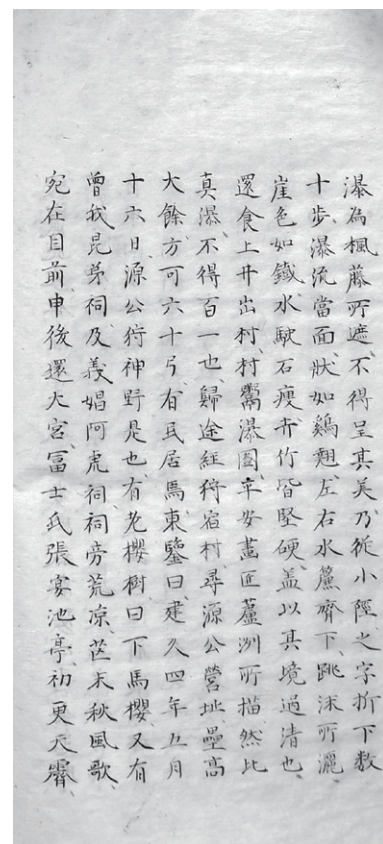
八日の早朝、岳廟（富士山本宮浅間大社）に参拝した。廟の後ろは深い森で、四角の池があつた。その池は澄み渡っていた。深さは三、四尺（約九〇から一二〇センチ）で、登山者はこの池の中で水を浴びる。これを垢離という。つまり塵や垢を落とす事である。池は南方に流れており、神幸橋という橋がかけていた。橋の下には、鰻魚（魚種は不明）がたくさんいた。社殿の北には、周囲七弓（約一七メートル）にもいたる老いた杉があり、その中のウロには蛇がたぐさんいた。『甲陽軍艦』には煙を吐く老杉があると記されるが、まさにこの木である。



東游日歴-2



東游日歴-3

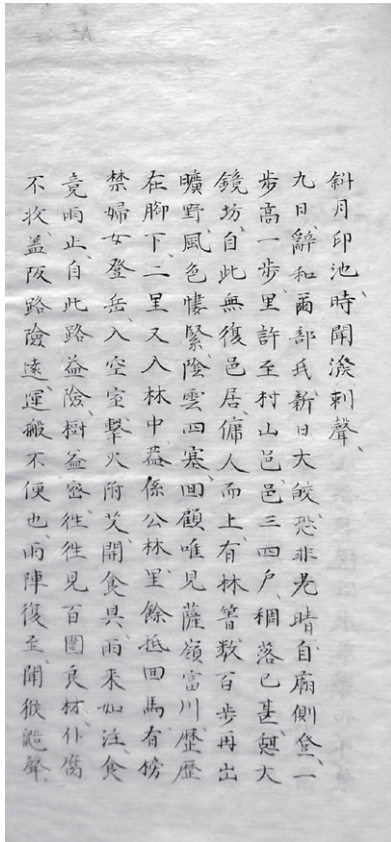


東游日歴-4

ここから右に折れて北に進み、雙山風穴(万野風穴か)を訪ねた。穴の中には水があり、数十歩入ると、風気は甚だ冷たかった。自分は目を患っているので、灯の煙に耐えられず、穴の外にでた。穴の外は高原で、万野原という。ここは、天正年間織田公が甲州の南から下つてきて、兵士に試馬を命じた所である。また、備前渠という渠(堀)の跡があった。ここは、伊奈備前(伊奈忠次)が水を引き開墾しようとしたが叶わなかったという。ここから西北に進み、大石寺に至った。一四弓(約三〇メートル)四方の宝殿で、金碧に光輝いていた。これ以外にも影寝(御影堂か)、輪藏(経藏)、鼓楼、鐘楼など建物は十七院に及ぶ。また、五層の浮図(仏塔)があり、彫刻は目がくらむほどである。細かな傷があるものの、非常に技術が高い。この西には、日興(大石寺の開基)が説法した場とされる説法石がある。富士山の西には北山本門寺、西山本門寺、久遠寺、妙蓮寺、大石寺の五寺がある。これらは皆富を積み、日蓮の教えを奉っている。また、北へ二里ほど進み、上井出で瀑布(白糸の滝)を見た。

滝は楓や藤によって遮られていたため、その美しさを堪能することができず、小道に従って数十歩進み、瀑流を正面からみた。その状態は鶏の羽のようで、水が左右から流れ落ち、飛沫が跳ねていた。崖の色は鉄のようで、水の流れば速く石は痩せている。また竹は皆硬い。その様子は清らかである。上井出村に戻って食事をとった。村では滝の図を売っていた。この図は、『平安人物志』に登場する画家、廬州(長沢廬州)が描いたものであるが、実物を見てからは嘘のようなものである。帰る途中、狩宿村に立ち寄って源公(源頼朝)の営跡を尋ねた。そこは六〇弓(約一五〇メートル)四方の広さであり、民家があった。その東が建久四年五月一六日に源公が狩をおこなった場所である。ここには、下馬桜という桜の老樹があり、また曾我兄弟の祠、曾我十郎祐成の妾である阿虎(虎御前)の祠がある。祠の周囲は荒涼としており、秋風が吹いていた。午後四時頃、大宮に戻ると、富士氏が池亭で宴を催してくれた。空は晴れ渡っており、池に月が写っており、魚が飛び跳ねる音を聞いた。

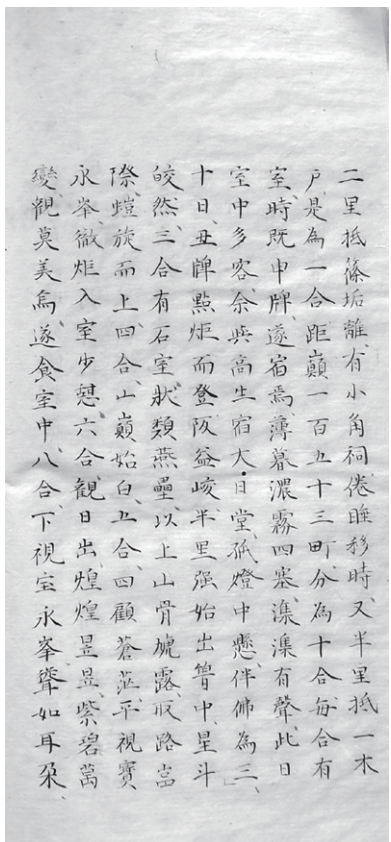
九日、和爾部氏に別れを告げて、廟の側から登り始めた。一步一步進み、村山へと至った。村の戸数は三、四戸で凋落が甚だしかった。村山の大鏡坊で休息をとり、ここから上に住んでいる人はいないので、人を雇った。進みはじめると竹林があり、数百歩進むと再び広野に出た。この辺りで急に雲が出てきて、周りが見えなくなり、只々薩埵嶺や富士川を思い出して歩いた。二里ほど進むと林の中に入った。この辺りは公林である。馬返しに至ると傍に婦女の登山を禁じる札があつた。馬返しの空室に入り、芝に火をつけて食事を取ろうとする。雨が降ってきた。食事が終わる頃には雨が止んでいた。ここより道はますます険しくなり、樹木はますます鬱蒼としてきた。この辺りの木は良材ではあるが、道が険しいため、運搬は不便であろう。再び雨が降ってきて、猴巖（サルヤムササビ）の声を聞いた。



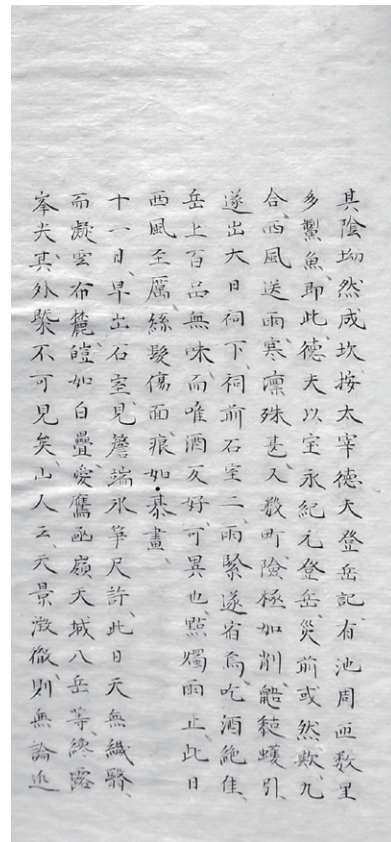
東游日歴 -5

二里ほど進むと笹垢離に至る。ここには役行者の祠がある。時が経ち、うとうとと眠くなってきた。また半里ほどで一ノ木戸に到着した。ここが一合目であり、山頂までの一五三町（約一六・七km）までは一〇合に分けられており、各合目に室がある。時はすでに午後四時頃で、宿をとる時間であった。周囲は薄暮で濃霧が四方に立ち込めていた。この日、室の中は客が多く、自分は少し上の大日堂で宿をとった。大日堂の中には燈が一つだけかけられており、仏像が三体祀られていた。

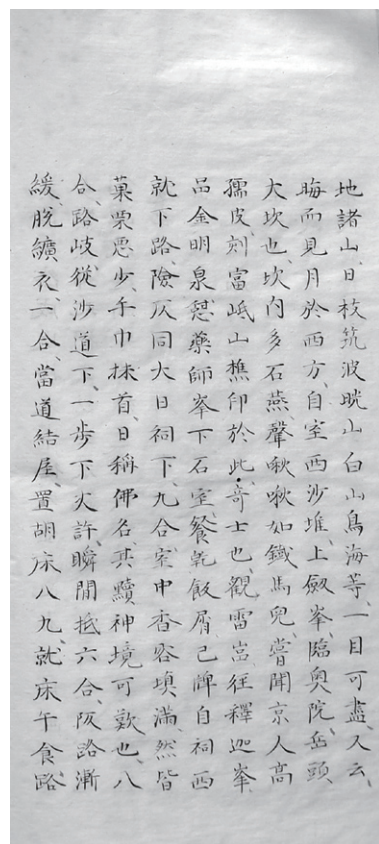
十日、午前二時頃から松明に火をつけて登り始めた。坂はますます険しくなり、半里ほど進むと竹が出始めた。空には星が輝いていた。三合目には石室があり、それは燕の巣のような状態であつた。これより上は山の岩石が露出しており、それを掴みながら道を進んだ。四合目あたりで山頂が白くなり始め、五合目であたりを見回すと青々として広々としていた。そして、宝永山を横に見ることができた。ここで室に入って少し休んだ。六合目で日の出を迎えた。日の光は煌々昱々としており、紫碧に変化する様は非常に美しかった。室の中で食事をとり、八合目に至ると宝永山が下に見えた。宝永山は耳たぶのように聳えていた。



東游日歴 -6



東游日歴-7



東游日歴-8

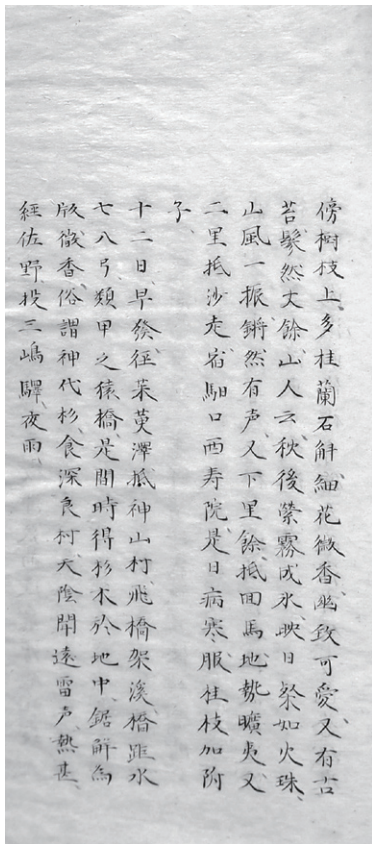
その穴は削られたようにくぼんでいる。太宰徳夫(春台)の登岳記によれば、周辺数里の池があり、そこには■魚(コノシロ)が多くいたとのことである。すなわち、この徳夫の登山は噴火前のことであり、あるいはそのようなこともあったのかもしれない。九合目では、西風によって雨が降り出し、寒さがことさら厳しくなった。ここからの数町は極めて厳しく、這いつくばって進んで遂に大日の祠の下に出た。祠の前には石室が二軒あり、雨がひどかったため、ここで宿をとった。ここで飲んだ酒は非常に美味しかった。頂上ではどんな食べ物も味がなく、ただ酒だけあれば良い。燭に火をつけると雨が止んだ。この日は西風が激しく、糸鬢が顔を傷つけた。

十一日、石室を早く出てみると、室の庇に氷筍(水の滴りが凍ったもの)が置いていた。この日の空はわずかなくもりもなかったけれども、麓には布のような雲が白い畳のようにかかっていた。そのため、愛鷹山や天城連山の峰々以外には何も見えなかった。山の人が言うには、天氣が澄み渡っていれば、近くの山は無論のこと、諸山が見えるという。

曰く、筑波山、眺山、白山、鳥海山などが見えるという。またその人が言うには、月の終わりでも西方に月が見えるという(本来ならば新月で見えないが、富士山頂からは見えるということか)。自分が泊まった室から西は砂地で、その上に剣ヶ峰がある。奥の院を臨むと石燕が多くおり、低い声で鳴っていた。かつて、京の人である高孺皮(高芙蓉)がここで、富峯山樵の印を刻んだと聞いたことがあるが、珍しい人である。雷岩を見て、釈迦嶽から金明水に至り、薬師嶽の下の石室で休憩し、乾飯屑(干した米を砕いたものか)を食べた。午前一〇時頃、祠の西から下山を始めたが、登山の時に苦労した大日祠の下と同じように、道は険しかった。九合目の室の中は香客(参詣者)で一杯であった。皆手拭を首にかけ、仏名を唱えている。その様子は神境が汚されているようで嘆かわしい。八合目で道が別れ、そこから下は砂道であった。一步一步が大きく、あつという間に六合目についた。坂道はようやくやくなだらかなり、綿入れを脱いだ。一合目には小屋があり、中には胡床(床几)が八、九個置かれており、そこに座って昼食をとった。

路傍の木の枝は茂り、桂蘭や石斛（いずれもランの一種）が多くあり、小さな花の微かな香りが漂っていた。また、古い苔があり、山の人が言うには、晩秋になると霧が水になって苔に付き、太陽の光を写して火の玉のようにになると言う。山の風が吹き渡ると、■然なる音（サラサラと美しく聞こえる音）が響いた。そこから一里ほど下ると、馬返しについた。この辺りは、広々としている。また二里ほどで、須走の西寿院に到着した。この日は寒気がしたので、桂枝に附子を加えた薬を服用した。

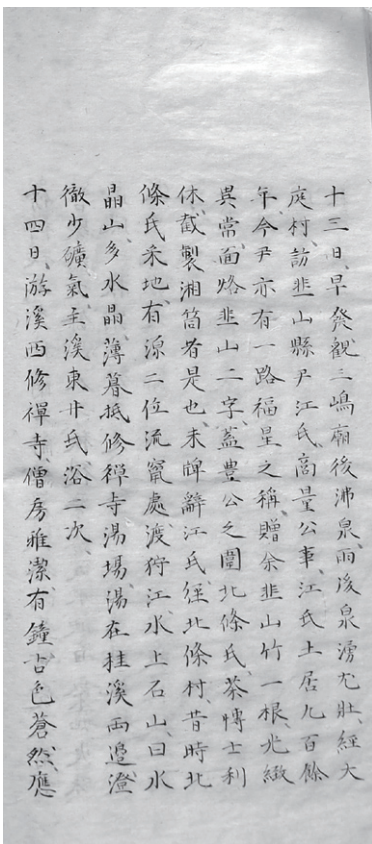
十二日、早くに出発をして、茱萸沢から神山村へと向かった。溪谷には飛橋（吊橋のことか）が架けられており、橋と水面との距離は七、八弓（約一七メートル）ほどであった。似たような橋に猿橋がある。この間に、地中から得られた杉をみた。鋸で板にすると微かに香ると言う。いわゆる神代杉である。深良村で昼食を食べると、曇ってきて遠くで雷の音が聞こえた。暑さが甚だしく、佐野を経て三嶋宿へと入った。夜は雨であった。



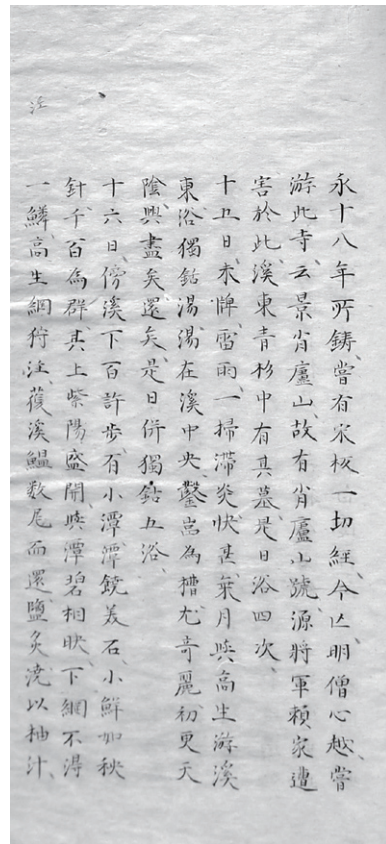
東游日歴-9

十三日、早くに出発して三嶋廟（三嶋大社）を見た後、沸泉（柿田川湧水群か）に向かった。雨のあとで、水が勢いよく湧いていた。大庭村をへて、葦山を治めている江氏（江川氏）を訪ねた。江川氏は天下家のことをよく考えている。また、江川氏はこの地に九〇〇年以上住んでいる。また、今、治めている人（江川英毅か）は一路福星（全てのの人にとつての幸福の星）であるとも称されている。江川氏は自分に葦山竹を一本贈ってくれた。その輝きは尋常ではなかった。この竹には葦山の二字が入っている。豊公（豊臣秀吉）による北条攻めの際、茶博士の利休がこの竹で茶道具を作ったという。午後二時頃、江川氏に別れを告げて北條村に向かった。ここは昔北条氏が治めていたところで、源二位（源頼朝）が流されていた場所である。狩野川を渡る所の水上にある石山は水晶山と呼ばれており、水晶が多くとれる。薄暮の頃、修善寺の湯場に到着した。溪流の両側に桂があるところで、溪流は澄んでいて少し礦気がした。湯の主は東井氏で二回湯に入った。

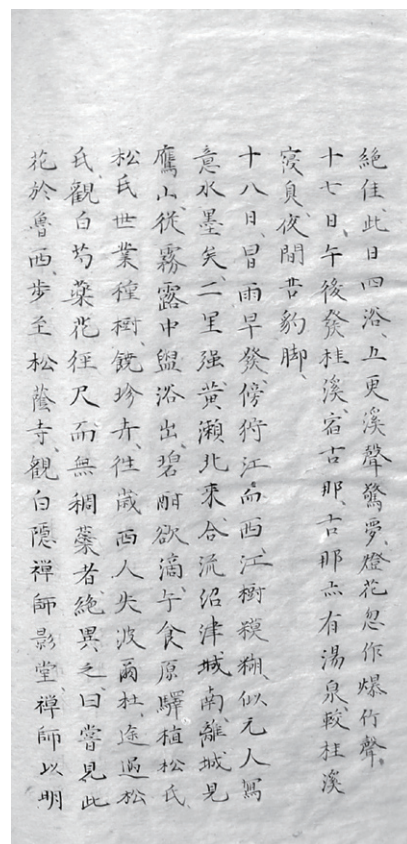
十四日、湯の西の修善寺の雅潔という僧房を訪ねた。ここには古色蒼然とした鐘があった。



東游日歴-10



東游日歴 -11



東游日歴 -12

應永一八年(一四一一)に鑄造されたものだという。かつて、ここには宋版の一切経があつたが今はない。昔、明の僧である心越がこの寺を訪れた際に、景色が中国の廬山に似ていると言つたことから、肖廬山という山号を有している。また、この地は源頼家が暗殺された場所であり、溪流の東にある杉林の中にはその墓がある。この日は四回湯に入った。

十五日、午後二時頃雷雨があり、滞っていた熱気を一掃してくれて甚だ心地よくなつた。独鈷の湯に入った。独鈷の湯は溪流の中央にあり、湯を溜めるために岩が削られている。この風景はもつとも綺麗であつた。天気は曇っていた。この日は独鈷の湯もいれて五回湯に入った。

十六日、溪流の傍を下の方に百歩ほど進むと、小沢があつた。沢には石がたたくさんあつた。小さい魚はまるで植えたばかりの稲の苗のようで、数多く群れていた。その上には、紫陽花が満開であつた。沢は青々と澄んでいて、網を入れたが一匹も取れなかつた。それでも鱈(イワシ)のようなものが数尾取れて、塩で炙つて柚汁とともに食べた。

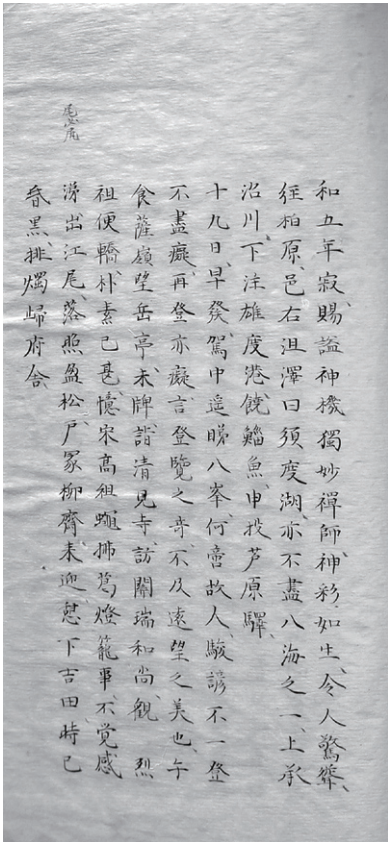
その味は格別であつた。この日は四回湯に入った。五回目の湯の際に溪流の音に驚いた。灯芯の燃えさしの先の塊が突然爆竹のような音を出したのである。

十七日、午後、修善寺を出発し、古那で宿をとつた。古那にも温泉がある。夜は豹脚(蚊)に苦しんだ。

十八日、雨の中、早くに出発し、狩江から西に進んだ。浜辺の木々がぼんやりと見えて、元の人を描いた水墨画のようであつた。二里ほど黄瀬川に沿つて北に進むと沼津城に到着した。城から離れると鷹山(愛鷹山か)が見えた。昼食は原宿の植松氏で食べた。植松氏は種樹(色々な樹木を売つたり、果樹の接木をすること)を世業とし、珍しい花々がたくさんあつた。ある時、シーボルト(文政六年に訪日、植松氏の庭園・帯笑園を訪れた記録が残る)が植松氏が育てている白い芍薬の花を見て、絶景であるといい、かつてロシアで見たことがあると言つたという。続いて松蔭寺に向かい、白隠禅師の御影堂を見た。

禪師は明和五年（一七六八）に亡くなり、神機獨妙禪師の謚を賜っている。神彩のごとく生きて、その名はよく知られている。柏原に向かうと、村の右には須津湖と呼ばれる沮沢がある。これは富士八海の一つである。須津湖から流れる沼川は雄度港（吉原湊）に注ぎ込み、たくさんの鱒魚（ボラ）がいた。午後四時頃、吉原宿へと到着した。

十九日、早く出発し、駕籠の中から八峯（富士山）を眺めた。駿河のことわざ「一登不盡癡再登亦癡（富士に一度も登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿）」というものがあるが、登ってみることはおかしなことではない。遠方からその美しさをみることだけではつまらない。昼食は薩埵嶺の望岳亭で食べ、午後二時頃清見寺の關瑞和尚を訪ねた。烈祖（大きな功績のある先祖）は轎（駕籠）を利用した。自分は甚だ素朴である。宋の高祖（劉裕）のことを覚えており、思わず感涙した。江尻を出ると、松の向こうに日が落ちていった。戸家の柳齋が迎えに来てくれて、下吉田で休憩をとった。すっかり日が暮れた頃、燭を並べた府舎へと帰り着いた。



東游日歴 -13

富嶽行記読み下し文（富士山周辺部分の抜粋）

○六月三日 行程七里

大宮 村山 富士山木戸室 寓宿 室之小屋

けふは主人の世話にて当所大宮の富士宿坊にて切手を取り  
 旦は案内の男■（抹消）を雇い山路を越え漸く村山に来たる 此地に  
 きた宿坊なる大鏡坊と云う坊に着く さて院の主人に登山の事を  
 談じたりして院主云く此節北口ならば裏山にて登山の人  
 あるやしらず 此口は表山に路険しくまた山もいまだ若ければ  
 いまだ当年登山の者なし 路も去年のままにて兩三日も過ぎなほ  
 山路伐り造る事なれば 登山苦しからざれども 今にては我等吾人  
 にては許しがたし 同役など問い合わせ申さんとて彼此手間取り  
 漸くして云いようは 何れ強力を指図して参らば 登るたげば  
 □□□べし 且つ此口登山は各方初めての踏分け先達なれば随分  
 真心慎み給えとなりければ家兄琴鳥園同伴山楓子ならびに  
 予男子共に三人此地にて垢離伐とり母公を当院に残し置く さて  
 案内を頼み午飯を過ぎて登山に志す そもそも富士山は此地より  
 根廻り五里の間は樹木生い茂り其の路に札打横根権現坂  
 長坂中宮八幡宮御馬返し女人堂新小屋大もみ笹  
 垢離不動尊小室大日と登り 当大日の宮下に小家あり  
 是にて日は暮れ一宿す 此処麓より五里の境際にて誠に  
 樹木生い茂りて深山と云うもおろかなり 此に参る人には吾等三人  
 外に雇いたる強力男老人すべて四人の外更に人なし 終夜  
 強力男共側の枯木を拾い集めて窯炉に焚きたる その側に  
 何れも跪居して徹夜するのみ 其の寒涼殆ど十一月頃の  
 氣候□とも謂うべし 夜中若し兩便の催しある時分家外にて  
 空地に出たる 懐中紙を地に敷きたる 其の上に用をなす 直に

地上を汚すことを忌む 此等皆強力の差図なり 且つ亦時として怪しきこともましなるとぞ 所謂鼻高様の多き場なりとも彼の者云うさもありぬべし さて母公は男勝りの気質にて是迄神社佛閣名所旧跡遊歴の場近く必ず至り窮めて楽しみせる なれど此富士ばかり古しより庚申の年ならでは夫人登山叶いがたしされども努めて女人堂一見せんなりとの望み 母公には駕籠を雇いて伴い来たり是より例の坊に返したり

○ 六月四日晴夕方雨

山路はすべて陰晴ばかりがたし 況や此富(土)山は別名に三國之秀たる名山なれど比類なき高山なれば陰晴瞬息の間に替わる事常なり 幸い今朝は晴渡りたれば何れも奇異に勝□つ速に小屋を立ち出でたる 此より汀(頂)上の大日如来堂ありて此より山頭まで禿山となり其の間まに一合式合を以て斗る 壺升旦にて山上に至る事なり 皆砂石碌々たり 此木立の処より下は神の地にて木立より上禿山の場合は佛地也とぞ 七合目に筋岩と云うあり 七合目の上に胸突坂と云うなり 其の辺り中を以て人間業の登らるべき地ならば只々念佛の声を力に登り得るのみ 此辺より南方を見下ろせば伊豆の鼻 右は三穂の出洲より伊勢鳥羽の辺り 左は箱根の湖より江の嶋房州の辺りまで足下に連れり 実に天上より見るごとし 四方の山々を踵□□は此地なり さて最上頭に登り得れば入口に大日を安置せり 山上には大洞あり 御鉢と云う 此洞中富士浅間鎮座と云う 此洞の廻り壺里ありとぞ 其の側に湖水あり ㊦の池というなり 洞の四方のはずれに八つの峯あり 所謂八辨の峯なり 処々を目撃し湖水の側にて麗しき白石并焼石各二箇を拾い給い得て 夕刻宿坊へ下り来たる 誠に珍しき快晴なりしが 木立の辺りへ

帰り来たる時少雨肅々と降り来たりたり 此外記載すべき事件多くあれども筆廻らず 殊に山霊の恐れあれば詳に記さず 誠に此山上恐るべき山にて帰途の砌枯骨処にある 裏口には猶さら千人塚又十六人塚等ありとぞ 強力の物語なり 予等は上下一つ道にて見ざるなり 此山は人皇七代孝靈天皇五年に出現し近江湖水同時に開くと云い伝う 唐土は東國の末世秦始皇の創業の始に当れり 山神は女神にて木華開耶姫なり 即ち大山祇神の二女なりと云う

○ 六月五日晴

村山 ヲモス(重須) 上井出 下山 大宮 旅舎 松葉屋

行程六里余

今日は母公を伴い責めて此まで参り申す験に富士の人穴の古跡を一見まいらせんと 駕籠を頼みしに監興やむことなし 案内者を雇いたる処行違いにて兩人来たりしかは此幸いにて とある監興を借受け宿院の恵なり 此にて立出て宮内村よりヲモスに出る 処本門寺と云う法華寺に参詣す とて富(土)山の裾に五ヶ所の法華寺あり 此其の一なり 尤も大院なり 少し行けば甲州郡内路に出る 上井出の前に至れば往來の旅人専ら噂ありて云いよう 人穴の先根原の辺りに狼出る 八人の怪我ありしと事 もしまたなし至る事底三昧悪敷是も神の告げにもありなるかと至らず止みぬ 此辺り白糸の瀧あり 一見すべしと人穴を見ざるは遺念なり さて白糸の瀧を一見せしに誠に奇景の絶勝なり 凡瀧幅式三拾間にも見え尤薄く落る 瀧壺はあまり深からず 中には細流あり大流あり 左右の巖岸の上より一面に藤の蔓伸ばするあり 花盛りの頃は別而奇観ならんと思ひ 此瀧鎌倉頼朝の吟詠もあるよしいまだ聞き予も感興のあまり嗚呼かましくも一詠を吐出す



まことなきながめをここにするがなるふじの吹雪の白糸の瀧

さて上井出の宿はづれ此瀧に来る路傍に一つの塚あり 其の上にはふの木一株あり 下に工藤左右衛門尉祐経塚と記なり 是なん古昔工藤を葬り申す処なりとぞ また上井出の下面に入りて一式丁程にて狩宿村と云うなり 此に下馬桜と云う古木の桜あり 此地古昔右府の狩場なりとぞ 桜木の前に百姓あり 井出傳右衛門と云う 是昔し狩場の大屋役を勤めし家なりとぞ 夫より中井出に出るなり 下山の宿亭より大宮に來り先日一泊せし松葉屋某の亭に着く

○六月六日 東海道宿

行程七里余

大宮 吉原 原 沼津 旅舎あら井屋

けふは大宮を出て吉原に出る 半途にて久澤と云う処に夫婦石と云うあり 縁結びの神なり 其の地を過ぎて阿つ原(厚原)と云う処に 右傍の竹木の下に碑石あり 時宗念力水と記すめるなり

由縁也と里人に問うて此地こそ時宗刑せらる場なれとぞ 其の時に此水を飲みしとぞ 誠に昔を偲び憐を催し候也 少し下り来れば曾我八幡宮と云う古社あり 宿院に□ 至れば□多の遺物を見ゆぬ 頼朝より時宗に給りし 状あり 又時宗夜打の前夜辞世の肉筆一幅また妓女 虎女の持し八角の鏡一面等あり 右等見し さて少し 来れば右の方に曾我寺と云う碑あり 入る事式丁余にて 寂を肅々たる荒寺あり 門内に圍(かこい)あり其中に二基の 五輪塔あり これ即五郎十郎兄弟の墓なり 前には二基の 燈籠あり 此を距りて山に傍い□ 吉原宿に出れば 是東海道驛次にて予往年母公并に元橋氏また此度 同伴の小嶋氏山楓子を物□を頼み 大和廻りの折□往還せし 地にてあらましは其時の紀行西遊□□に載れば今さら記す 処もなし 夕刻沼津の旅亭に着く 当所に水野候の 城下□ありて 夕めしをとも魚肉多く相用い調理もよく 少しは今迄の不自由も少しは忘れぬしか 近隣娼婦の 騒ぎ是旅中一睡の妨げ また閑遊の幽情をして 俗塵に纏はしむるは恨なれさわいかん 是もまた一興ならん

## 平成 28 年度 博物館職員

館長	木ノ内 義 昭
主幹	齋 藤 俊 之
主 査 (学芸員)	高 林 晶 子
主 査 (学芸員)	瀧 浪 和 美
主 査 (学芸員)	井 上 卓 哉
上席主事 (学芸員)	藤 村 翔
主 事 (学芸員)	杉 本 寛 郎
臨時職員 (指導員)	久 保 田 英 聖
臨時職員 (管理員)	宇 佐 美 和 代
臨時職員 (事務補助)	金 刺 才 己
臨時職員 (事務補助)	土 屋 麻 由 美
臨時職員 (調査員)	山 本 倫 弘

### 富士山かぐや姫ミュージアム 館報

#### 第 32 号 (平成 28 年度)

編集・発行 富士山かぐや姫ミュージアム (富士市立博物館)

〒 417-0061 静岡県富士市伝法 66 - 2

TEL 0545(21)3380

FAX 0545(21)3398

E-mail : museum@div.city.fuji.shizuoka.jp

URL: <http://museum.city.fuji.shizuoka.jp>

発行日 平成 29 年 8 月 31 日

印刷 文光堂印刷株式会社